

アフリカの誘惑

——ミシェル・レリスとダカールⅡジブチ調査団

谷 昌 親

パリで植民地博覧会の幕が切って落とされてから二週間近くが経つ一九三一年五月十九日、アフリカをめざして一艘の船がボルドーから出港した。このサン・フィルマン号には、アフリカ北部におけるフランスはじめての本格的なフィールドワークを使命とした〈ダカールⅡジブチ、アフリカ横断民族誌学・言語学調査団〉が乗り込んでおり、そのなかには、シュルレアリスムの運動にも加わった作家・詩人であるミシェル・レリスの姿もあった。そして、この調査団に参加して約二年ほどをアフリカで過ごしたことが、レリスの人生に大きな影響をもたらすことにもなるのである。

ヨーロッパの植民地宗主国のなかでも、イギリス、ドイツ、オランダといった国々は、第一次世界大戦以前に自国の植民地に対しておおがかりな民族学のフィールドワークをおこなっていたのに対し、フランスは、エミール・デュルケーム、マルセル・モース、リュシアン・レヴィ・ブリュールといった優れた社会学者・民族学者を輩出したものの、これらの学者たちはいずれも現地調査をおこなわずに、植民地を訪れた旅行者や植民者からもたらされた資料をもとに自己の理論を打ち立てるという方法をとっていたため、フィールドワークの分野では大きく遅れをとってい

た。そうしたなかで派遣が計画されたのがこのダカールⅡジブチ調査団で、これは国家的事業というべきものになつてゐた。一九三一年の三月三十一日に議会において満場一致で採決された法律により、調査団の財政上の基盤の保証が決まり、省庁や植民地政府、大学や学会、銀行や企業などの後援を受けるとともに、展覧会、講演会、そしてラジオや新聞雑誌などでの関係者のインタヴューなどを通じて宣伝がおこなわれ、資金の調達が図られた。調査団の結成に向けて議会で積極的に動いたのが公教育相のマリオ・ルスタン、そして植民地相ポール・レイノーの官房長カストン・パレヴスキだったあたりにも、この調査旅行が、表向きはあくまで学術的な目的のものでありながら、植民地行政とも無縁ではなかった事情が透けて見えてくる。もともと民族学は、その研究対象が概して植民地の社会や文化となるだけに、学問という隠れ蓑の下で植民地行政に貢献するといった側面を否定しがたい。むしろ民族学は、いわゆる未開社会に文明は存在しないという当時はむしろ一般的であつた偏見を打ち砕く役割を果たすわけだが、そこでもたらされた知識が植民地管理のよりよき方法の開発にも役立てられたのである。

ダカールⅡジブチ調査団の最大の使命は、フィールドワークをおこなう一方で、トロカデロ民族誌学博物館（一九三九年に人類博物館となる）の所蔵品を充実させるための蒐集をおこなうことであつた——だからこそ、フィールドワークに必要な長期滞在を犠牲にしても、調査団は移動を続け、各地で蒐集をおこなつたのである——が、これは一九二九年に、国立博物館の人類学講座を担当するポール・リヴェが民族誌学博物館の館長に就任するとともに目論まれた改組の延長上にあつた。一八七八年に博物学者テオドール・アンリの手で創設された民族誌学博物館は、一九〇八年にアンリが死去したのちは顧みられないままになっており、所蔵品にも体系性が欠け、特にアフリカ部門のコレクションはかなり貧弱なものであり、アンリの後継者となつたリヴェ、そしてリヴェの館長就任と同時に副館長に招かれたジョルジュ・アンリ・リヴィエールは、その欠損を埋め、学問的な見地から蒐集した品々を体系的に展示す

ることを目指していた。すなわち、博物学の伝統を受け継ぎ、対象となる民族や文化の類型が明らかにされねばならなかったのである。そして、その類型も植民地支配の発想につながっていく。民族誌博物館は「文化的かつ植民地的なプロパガンダの道具」、つまり、「植民者全般、特に将来の植民者のために、統治管理の対象となる民衆についての資料を集めた貴重で不可欠のセンター」⁽¹⁾になるべきだとリヴィエールは言明している。そうした方向性は、パリ植民地博覧会が好評を博することで、さらに強められていくことになる。

ダカールⅡジブチ調査団派遣のために準備された公的資金は七十万フランであったが、それに加えて、さまざまなかたちでの資金調達が試みられた。資産家などに寄付を求める動きもあり、ミシェル・レリスは年長の友人であった作家レーモン・ルーセルから寄付を得ることに成功している。また、映画『黄金時代』に出資したことでとりわけ知られるシャルル・ド・ノアイユ子爵も寄付をしている。その一方で、一見すると調査団と無縁と思われる催し物の入場料を資金に繰り込むといったことまでおこなわれた。一九三一年四月十五日、パナマ出身で国籍はアメリカの黒人ボクサーであり、バンタム級の世界チャンピオンの座にあったアル・ブラウンが、パリのシルク・ディヴールで特別興行を開いたのである。ダカールⅡジブチ調査団の団長となるマルセル・グリオールは、試合の前日、『フランス・ソワール』紙に一文を寄稿し、それをこう締めくくっている。「アル・ブラウンは、世界全体の利益にかなう次のような大義のために、その拳を役立てることになるのだ。つまり、植民地の人々の精神構造についての理解を深め、植民地の支配者と被支配者のあいだにいままで以上に豊かな協力体制を可能にし、しかもそれを、力に頼らず、より理性的なかたちで実行するのである」⁽²⁾。黒人であるというだけで、「文明国」アメリカに住むボクサーにこうした大義を担わせるのは一種の矛盾であるが、逆に言えば、それが当時の黒人や植民地についての人々の理解であったということにもなる。ジャン・ジャマンは、このアル・ブラウンの試合当日、民族誌学博物館の警備員が制服に身を包んで

ングの四方に立っていた事実注目し、それが、のちに調査団がアフリカの地から持ち帰り、新装なった展示室でやはり警備員に守られて人々の視線を浴びることになる品々を暗示していると述べる。⁽³⁾ いかなる大義が持ち込まれようが、植民地の支配者と被支配者という構図そのものが揺らぐわけではなく、民族学のコレクションや黒人は、主体性を奪われ、ヨーロッパ人の側からの一方的な視線の対象になっているのであり、そうした意味では、どちらも「見世物」なのである。

アル・ブラウンの特別興行によって総額十万一千三百五十フランの収益があり、これはダカールIIジプチ調査団のための基金とされたが、その一部は、グリオールが企画・監修し、レリスが執筆した『民族誌学関係の品々を蒐集するための要項』というパンフレットの出版費用にも当てられた。数千部が刷られたとされるこのパンフレットの内容は、パリ大学民族学学院でのマルセル・モースの講義を基にしており、題名が示すとおり、民族誌学関係の品々の蒐集について、どのような品をどのように収集すべきかを説き、分類の仕方やカードにデータを記すやり方といった細かい指示も付いていて、調査団が通過する地域の行政官や植民者に配られることになっていた。たんに蒐集するだけでなく、こうした分類や整理をおこなうことによって、民族学の対象となる文化の表象化が試みられるわけだが、その表象化の行き着く先が民族誌学博物館での展示であった。アフリカにも近代化の波が及び、伝統的な社会が消滅の危機に瀕しているとの認識があるなかで、文化の保護のために、その文化によって生み出された品々をもとの文脈から切り離し、あたかも標本のように並べる道が選ばれたわけだが、標本にされた蝶が生命なき骸であるのと同じで、蒐集品もそれが生み出された社会の現実から引き離され、表象となってしまう。それが民族学という学問がはらむ根本的な矛盾でもあった。

*

とはいえ、すでに述べたように、ダカールⅡジプチ調査団は、グリオールのような学者がみずからフィールドワークに乗り出すという意味で、その矛盾を部分的にでも解消するという意図もあったといえよう。調査団には全部で十一名が参加した。団長のマルセル・グリオールは、当時、パリ大学附属の民族学研究所で助手の地位にあり、ロックフェラー財団の給費生でもあったが、国立東洋語学校でエチオピア中央部の言語を特に専門としていた恩師マルセル・コーエンの後押しで、一九二八年から二九年にかけてアビシニア（エチオピアの古称）中西部のゴジャン地方で民族学および言語学のフィールド調査をすでおこなっていた。ダカールⅡジプチ調査団の副団長を務めたのはマルセル・ラルジェで、彼はアビシニア調査団にも同行した実績があり、経理のほか、博物学関係の観察や蒐集を任された。ミシエル・レリスは秘書兼文書係として参加しているが、グリオールは彼に、子供社会、老人社会、宗教制度についての調査も課していた。エリック・リュタンは技術部門の担当で、ときには映画撮影をおこなっていた。アンドレ・シェフネルは音楽学者であり、民族音楽部門の担当で、音楽の録音採集を手がけた。ジャン・ムシエは言語学部門の担当、ガストン・ルイ・ルーは画家で、主にエチオピアの絵画を集めたり模写したりし、デボラ・リフスジック（のちに綴りをフランス風に変え、リフシツツとなる）はグリオール同様にコーエンの弟子で、エチオピアの手書きの文書の蒐集や研究を任された。アベル・フェーブルは地理博物学者で、国立博物館の助手を務めていた。ジャン・ムフルとウクトムスキについては詳しいことはわかっていない。このうち調査団に最初から最後まで参加したのは、グリオール、ラルジェ、レリス、リュタンの四人で、ムシエとムフルは途中で離れ、逆に、ルー、リフスジック、フェーブル、ウクトムスキは途中で合流している。シェフネルについては、一九三一年十月から十二月までの二ヶ月ほ

どの参加であった。

この十一人のなかで、その後、民族学の分野で業績を残すことになるのは、グリオールのほか、レリス、シェフェル、リフスジックだけだが、なかでもレリスは、民族学という学問に一種の疑問を抱き、つねに相対的な視点から眺めつづけたという意味では特異な立場にあったといえよう。そうした彼の姿勢はこのダカール・ジブチ調査団への参加によって形成されたと考えられる。もっとも彼は、本来は文学畑の人間であり、アンドレ・ブルトンらのシュルレアリスム運動に参加して、その機関誌である『シュルレアリスム第二宣言』に夢の記述などを寄稿し、幻想的な詩を書いていた。しかし、一九二九年にブルトンが『シュルレアリスム第二宣言』を発表したのに伴うシュルレアリスムの分裂のなかで、デスノスらとともにブルトンと袂を分かち、盟友ジョルジュ・バタイユが中心になって同年から刊行をはじめ、翌三〇年までの二年間に十五号を重ねた雑誌『ドキュマン』に参加し、途中からは編集次長の任まで受け持つのである。ブルトンによるシュルレアリスムの観念性を批判し、「低い唯物主義」を提唱することになるバタイユと歩みを共にするなかで、レリスは自己の執筆姿勢にも変更を加えざるをえなくなった。そうした変化は、自動記述や夢の記述といったシュルレアリスムの方法に対する懷疑を生み出し、一方、日記の執筆が重視されるようになる。しかも、「内的日記がどこまでも真摯なものとなるためには、語られる出来事に関して、一切選択の痕跡を残してはならないだろう」と述べるように、主観の関与を極力排した客観的資料をもたらしものとして日記を見ていた。それと同時に、科学への関心も高まってくる。このころ彼が読んでいたのがレヴィ・ブルジュールの『原始的心性』やフロイトの『トーテムとタブー』だったのからもわかるとおり、民族学と精神分析学に急速に惹かれはじめていた。レリスと民族学の関係についてはのちに述べるが、精神分析学に関して簡単に述べておくと、この時期のレリスは神経症をわずらい、当時としてはまだ珍しかったが、バタイユの勧めで実際に精神分析治療を受けたのである。その治療の

おかげで幼年時代の思い出が甦り、それが『成熟の年齢』や『ゲームの規則』といった自伝的エッセを生み出す要因のひとつともなった。一方で、彼の治療を受け持ったアドリアン・ボレルからジョゼフ・コンラッドの『ロード・ジム』を読むように示唆され、また、伝記作者のアリエット・アルメルも指摘しているとおり、日記に大きな文字で記した「精神分析学」の語の下に、黒人レビュー〈ブラックバーズ〉のスターであったアデライド・アルの写真を貼るなど、精神分析学がレリスのなかで民族的な要素と結びつく萌芽もすでに見られたのである。⁽⁶⁾

こうしたレリスの新しい方向性は、ほぼ雑誌『ドキュマン』のそれに沿うものだった。『ドキュマン』は、「新しい方法に従って展開される二十世紀の百科全書、精神のあらゆる領域における過去および現在のすべての踏査の総和」を旨指すとされていたが、レリスがバタイユについて回想しながら述べたとおり、「ヤヌス的な刊行物であり、その二つの顔のうちのひとつは、文化の高い領域（…）を向いていたが、もうひとつは、いかなる種類の地図もパスポートも持たないまま分け入らねばならない野性の領域を向いていた」⁽⁷⁾のである。要するに、シュルレアリスムにおいて見られた神秘主義への関心から一転し、リアリズムへの一種の回帰が起ると同時に、科学が重視されたのだが、そのなかでも最も比重が高かったのが、民族学や精神分析学といったそれこそ人間のなかの「野性の領域」を扱う学問だった。とりわけ民族学に関しては、編集委員にジョルジュ・アンリ・リヴィエールが入っていたこともあり、多くのページが割かれたし、また、そのリヴィエールの肝煎りで、一九二九年にアビシニア調査から戻ったマルセル・グリオールがレリスとともに編集次長となり、さらに黒人美術に詳しい美術評論家のカール・アインシュタインも編集委員に加わったことで、アフリカ関係の記事もふえた。それと並行するかにように、レリスのアフリカに対する関心も高まっていったのである。彼はそれ以前から、ピカソらとの交友関係のなかで黒人美術に興味を抱くとともに、とりわけジャズをとおしてアフリカや黒人に惹かれていた。すでに第一大戦の終戦前から、ジャズはパリで紹介されて

いたが、『成熟の年齢』（一九三九年）で、レリスは当時を次のように振り返っている。

戦時につづく自由奔放の時期には、ジャズは集合の合図、当時の色彩に染められた乱痴気騒ぎの旗であった。魔術的な作用をもたらしていただけに、それがどのような影響を働かせるかは憑依状態にも比較できるだろう。ジャズは、こうしたお祭り騒ぎに真の意味、つまり宗教的、意味を与えてくれる最上の要素であり、その点で、ダンスや、潜在的なあるいはあからさまなエロティシズムや、あらゆる種類の集まりにおいて人びとのあいだの隔たりになっている溝をうめるのにもっとも有効な手段である酒など、そうしたものと同じだった。⁽⁸⁾

レリスにとってきわめて重要な概念である「憑依」がジャズとの関連で語られているのが興味深い。彼は続けて、ジャズによって「黒人の最初の発現、ぼくをアフリカへ、いや、アフリカを越えて民族誌学にまで導くことになる、有色人種の楽園神話」⁽⁹⁾がもたらされたともまで述べている。その後、一九二五年にシャンゼリゼ劇場の舞台で披露された「ヘルヴュ・ネーグル」は、シドニー・ベネットを中心とするバンドの演奏でジャズの魅力をパリっ子に遺憾なく伝え、さらにはジョゼフィン・ペーカーというスターを得て、爆発的な人気を博した。むろん、そのとき舞台上で繰り広げられた「黒人文化」はきわめて人工的に作られたものであり、レリスもやがてそのことに気がつくことになる。四年後の一九二九年、もうひとつの黒人レヴュー「ブラックバーズ」を目にして衝撃を受けた彼は、次のように日記に記している。

黒人レヴュー「ブラックバーズ」をムーラン・ルージュで観劇。すばらしいスペクタクル。（中略）このレヴュー

ーは、シャンゼリゼ劇場でジョゼフィン・ベーカーが出ていたレヴューとまったく違い、輸出用の演目などではまったくない。耽美的な傾向はまったくなく、すべてがはるかに純粹で素朴だ。⁽¹⁰⁾

レリスにとりわけ感銘をあたえたのは黒人のダンスだったようで、「支点を移動させ、それを身体のいかなる部分にも置ける」その才能に驚き、「動かない片手の先や頭にぶらさがるようにして、身体を波打たせる」と描写している。そして、同年の八月九日に妻ゼットに送った手紙では、「ああした人たちのひとりではないというのはいかにも残念だが、それは才能の問題ではなく、彼らのような生き方ができないという意味でだ」、と書き、さらに、十月二十八日付けの日記には、「数日前、黒人の問題の研究に着手しようと心に決めた」と記すに至る。実際、この頃から、彼は黒人やアフリカに関係した文章を書くようになっていた。一九二九年十一月に刊行された『ドキュマン』の第六号に、ウィリアム・B・シーブルックの『魔法の島』の書評を寄せるが、これは、ハイチについて書かれたこの著作の仏訳が出たのに伴うものだった。また翌一九三〇年には、キング・ヴィダーの映画『ハレルヤ』についての一文「聖なる黒人たち」を『ラ・ルヴュ・デュ・シネマ』誌六月号に発表し、さらに、ダカール・ジブチ調査団の計画が進みつつある十一月には、この調査団の意義を説いた「民族誌学者の眼」を発表している。レリスが民族学の勉強を本格的に始めるのはダカール・ジブチ調査旅行から戻ってからだが、出発以前にもマルセル・モースの授業に顔を出していたというから、それもこのころのことではないかと考えられる。

しかし、ジョゼフィン・ベーカーのエロティシズムを前面に押し出したヘルヴュ・デュ・ネーグルには懐疑的になつていたとはいえ、通俗的なエキゾティシズムの罠からレリスが完全に解き放たれたわけではなかった。たとえば、「聖なる黒人たち」のなかで彼は、「黒人種が、その理解者に対して及ぼす——神秘的でもありエロティックでも

ある——独特の魅惑⁽¹³⁾」について語っている。また、「民族誌学者の眼」では、「民族学の学徒によって遂行される学術旅行は（中略）少なからぬ誤謬を霧散させ、ひいては、その誤謬によってもたらされる数多くの弊害、とりわけ、それに対していくらか抗議の声を上げてもし足りぬほどの人種的偏見を壊滅させるのに貢献するはずだ⁽¹⁴⁾」と述べ、科学的な興味を超えた「人道的な」広がりを持つ試みだと強調する一方で、まずは幼年時代に見たレーモン・ルーセルの『アフリカの印象』の舞台がもたらした興奮を語ることから文章をはじめ、さらに、最近になって手にした『ちびくろサンボ』との出会いによって、幼年時代のころからの「エキゾティシズムの強迫観念」をふたたび見いだしたと語ってはばからないのである。

ジャン・ジャマンが指摘するように、この時点でのレリスは、黒人文化を一種のスペクタクルとして眺める視点をいまだ棄ててきていないし、そうした視点は、ダカールⅡジプチ調査団そのものにも存在していて、ドゴン族の葬儀やゴンダル（エチオピア）のシャーマンの憑依にとりわけ重点が置かれることになるのもそのためである。また、これもジャマンの指摘に従うなら、マルセル・モースが『贈与論』で提出した「全体的社会事実」という観念は儀式や儀礼における視覚的要素を重視しており、このことが先に述べたような調査団の姿勢に理論的基盤をあたえたとも考えられる。⁽¹⁵⁾ いずれにせよ、善意や科学的探究心に裏打ちされているとはいえず、現在の観点からすれば、黒人文化をあくまで客体としてしか見ない態度といわざるをえず、レリス自身も後年、いわゆる未開社会の文化を西欧文化よりすぐれていると単純に位置づける見方を「裏返しの人種主義の一種⁽¹⁶⁾」と呼ぶようになるのである。

*

一方で、ダカールⅡジプチ調査旅行の準備は整いつつあった。団長となるマルセル・グリオールにレリスを引き合

わせたのはジョルジュ・アンリ・リヴィエールであり、レリスによれば、もともと『ドキュマン』という雑誌を考えたのもリヴィエールだったという。⁽¹⁷⁾ リヴィエールは編集次長の職をグリオールにと考えていたが、そのグリオールがアビシニア調査旅行で不在であったため、シュルレアリスムと袂を分かったジョルジュ・ランブールをその任に当てた。ところがランブールは仕事らしい仕事をしなかったために解任され、レリスに編集次長の職がまわってきた。レリスも本来はグリオールの帰国までのいわばつなぎだったが、その仕事ぶりが評価され、すでに述べたように、グリオールとともに編集次長として残ったのである。もともとグリオールは、一九二九年末ごろから、アフリカ大陸を横断する計画を立てていたのだが、リヴィエールの助言により、『ドキュマン』編集部で知り合ったレリスにも声をかけ、記録係として調査旅行に参加しないかと誘ったのである。

ミシェル・レリスの側は、すでに見たように、黒人文化への興味をつのらせていた時期であり、グリオールの誘いを受けたのも当然と言えるが、その実、この決断の背後にはアドリアン・ボレルによる後押しがあったとされ、当時のレリスの精神状態も作用していたと考えられる。「民族誌学者の眼」の執筆用として、おそらく一九三〇年の後半に書かれ、のちに日記に添付されたメモのなかで、観光客としてではなく旅行する唯一の手段は、民族誌学者として旅することであり、そのとき、たんに馬鹿げたものに思っていた風景の内的な層が眼に入り、「深く総体的で、同時に人間的なものへとより高められた価値」⁽¹⁸⁾が備わってくると述べて、レリスは、「事物に対しての雄々しさ」を見いだすことの重要性にふれる。「われわれが事物に対して持つ雄々しさの関係は、旅をしていると容易に築くことができるのだが、それは、つねに更新される光景の新鮮さのおかげであり、新鮮であるだけに、光景は働きかけ、われわれの欲望を目覚めさせる傾向にむかい、従って、われわれを真に活動的な状態におき、そうした状態においてわれわれが使える力は支点を見いだすのだ」⁽¹⁹⁾。そしてそれはまた、時の進行に抗い、むしろ時を遡ることにもつながると

される。「旅で、空間に身を投げ、全力で取り組むなかで、そのことにより時の進行を逃れ、時が進むに従って逆にいわば時を遡るようになると感じられるし、そのようにすれば、侵食作用で碎ける鉱物さながら、不動の状態にあり、ただその作用に身を委ねているばかりのときはあんなにも恐ろしい時の猛威を無効にできるように思えるのだ」⁽²⁰⁾。レリスのなかで、調査旅行は、失われた雄々しさを取り戻し、時を遡って幼年時代の神話へと至る手段と見なされていたのである。そうした意味で、旅をひとつの冒険とみなしていたことは否定しがたい。レリス自身、民族学的なものに興味を抱ききつかけになった読書体験として、ランボーとコンラッドをあげている。しかも、ランボーに関しては、詩を棄ててエチオピアに渡り、「冒険家として暮らした」⁽²¹⁾点に惹かれたのだとも述べている。

＊

さて、すでに述べたように、レリスを含めたダカールⅡジブチ調査団の一向は、一九三一年五月十九日にボルドーから出航し、カナリア諸島やモーリタニアの港に寄航したのち、三十一日にセネガルのダカールに上陸した。以後は陸路を東に向かい、おもな国だけでも、仏領スーダン（マリ）、ニジェール、ナイジェリア、カメルーン、ベルギー領コンゴ、イギリスⅡエジプト共同統治領スーダン、そしてエチオピアとまさに冒険旅行さながらに移動していくのである。その間、秘書兼文書係として参加したレリスにとって、一日足りと欠かさずに日記をつけ、旅の記録を残すことが役割であり、その日記が帰国後の一九三四年に『幻のアフリカ』と題された単行本として出版される。この『幻のアフリカ』は、未来の民族学者としてのレリスにとってはもちろん、文学者としてのレリスにとっても重要な意味を持つ書物となるだろう。すでにアフリカに向けて発つ以前から日記をつけていた彼は、こうした日々の記録のなかで自己を客観的に見直す習慣を身につけていたはずであり、異国の地にあつて、自己を見つめるまなざしはさら

に厳しさをましていったからだ。しかしそのことは、冒険者きどりで調査団に参加した自己への批判となり、さらにまた、素朴な反植民地主義や科学としての民族学の限界を浮き彫りにしてしまう結果となる。それゆえ『アフリカの印象』は、レリス自身にとって、諸刃の刃のごとき書物なのである。

さきに見たように、レリスにはかなり早い時期から黒人や黒人文化への興味があり、同時に、植民地主義を痛烈に批判してもいた。一九二七年に、ギリシアに続きエジプトに旅行した彼は、旅先から妻に送った手紙で次のように書いている。「いづれせよよくがエジプトから持ち帰るものは、植民地主義的な精神へのかつてないほど強い憎しみになるだろうが、それは、地中海沿岸の住民がいかに虫が好かない連中であっても、植民地の官吏に較べればなにほどのこともないからで、やつらはひとり残らずあきれはてた馬鹿者で、卑しむべき獣だ⁽²²⁾」。黒人への親近感と植民地主義への憎悪は、彼にヨーロッパそのものを否定させるにまで至るのだが、『幻のアフリカ』にも、そうした記述が繰り返し現れてくる。たとえば、一九三一年九月二十八日には、仏領スーダンのハベ族からグリオールが聞いてきた生贄の儀式について記したのち、「ヨーロッパ人であるとは嘆かわしいことだ⁽²³⁾」との一文を記している。翌一九三二年三月十日、カメルーンを出てウバンギーシャリ（中央アフリカ）に調査団が入っていたころには、こうも書いている。「裸の人々のすばらしい清潔さ。非の打ちどころない端正な物腰、これに較べると、着衣のものはすべてへば絵描きか、ならず者に見えてしまう。なんとひどい乱雑ぶりだろう、ぼくたちの文明とは⁽²⁴⁾」。こうした姿勢は、白人としての自己の否定にもつながりかねず、黒い肌の人びとのなかにいる自分たちについて、「奇妙な白子のような肌⁽²⁵⁾」といった表現を用いることにもなる一方で、植民地主義をむき出しにして黒人を搾取する白人には憎悪をあらわにする。「とりわけて共感を感じさせるとはいえないかもしれないが、とにかく他のすべての人間に較べて愚鈍でも悪質でもないこの人びとに対して、文明の名にかこつけてこんな扱いをするとは、なんとという恥辱だろう⁽²⁶⁾」。旅のあいだ、

レリスはこのままアフリカに残って生活する自分を想像してみることもあったが、そう考えれば考えるほど、ヨーロッパの醜さが彼の眼には映った。彼は、日記と並行して、ほぼ毎日のように妻ゼットに手紙を書いていたが、一九三一年十一月十三日付けの手紙ではこう記している。「ぼくがここでなら暮らせるかもしれないと思える貴重な国々を、慰め物のようにして破壊するヨーロッパをけっして許すことはできないし、こうした忌まわしい卑劣さに対して厳しく抗議することが、将来のぼくの唯一の存在理由となるだろう」⁽²⁷⁾。

だがその一方で、こうした反植民地主義がともすれば素朴なエキゾティズムから派生してきたものであることにも、おそらくレリスは気づきつつあった。ゼット宛の手紙に以下のように記している。「植民地への旅行は忘れがたい教訓となる。なにもかも近くから見て、いかなる仮面も、いかなる舞台装置もないままのものを目にできる。容易に想像できるエキゾチックな感覚とはまったく異なるものだ。人生そのもののように切り立っている」⁽²⁸⁾。ランボー、あるいはコンラッドの小説の作中人物に憧れてアフリカの土を踏んだレリスだが、安易なエキゾティズムに陥る危険には自覚的であったのだ。もともと、民族学に惹かれたのも、心情的な反植民地主義にとどまらず、科学をとおして植民地を見つめる必要を感じたからだと思われる。ちょうど、シュルレアリスムに耽溺していた自己に距離を置き、日記を書くことで自己を客観的に見つめなおそうとしていたのにも似て。調査旅行に出てから二ヶ月ほどが経ったころ、儀礼に使われたと思われる綱を岩壁の下で見つけた彼は、科学的な調査の喜びにひたっている。「この綱のきれ端を発見してぼくは有頂天になるが、それは、科学的な調査には何か情熱をかき立てるものがあるということが少しずつわかってきたからだ。つまり、証拠品から証拠品へ、謎から謎への歩み、足跡を辿るような真理の追究」⁽²⁹⁾。そのさらに一カ月後、仏領スーダンのバマコ近くの町で駅に情報提供者を呼んでさまざまな話をさせていたレリスは、そうした調査の重要さを再認識する。「ぼくらが眼にすることができるかもしれない光景も、さまざまな物語の

魔術の前にことごとくぐらつき、消え去るが、その一方でそうした物語は、駅の建物の中のこの定住生活を、ぼくたちが旅行者として歩きまわれば送ることになるはずの生活よりも、ずっと強烈なものにする。それは人目をひく風景に対する闘いであり、エキゾティシズムへの嘲笑だ。誰よりも、ぼくは調査という冷酷な魔に取りつかれている」⁽³⁰⁾

*

ところが、こうして育まれつつあった科学への信頼や情熱は、旅が続くにつれて逆に弱まってしまい、むしろ科学としての民族学に対する疑念がレリスのうちに湧き起こってくるのだ。大きなきっかけのひとつは、仏領スーダンをバマコからさらに東へと向かっていたあいだに小村でおこなった「ヘコノ」の奪取である。「ヘコノ」とは呪物の一種で、この地方で祭壇として用いられ、隣人間の友好関係と秩序を保つ役割を担わされていた。一九三二年九月六日から七日にわたって、グリオールやレリスたちは村を回りつつ「ヘコノ」の置いてある小家を見つけては、言葉巧みに脅したり、人目を盗んだりして、三体の「ヘコノ」を手に入れるのである。特に二日目の九月七日には、レリス自身がリュタンとともに「ヘコノ」のある家に忍び込み、みずからの手で盗み出した。「心臓がひどくどきどきするが、それは、昨日の破廉恥行為以来、自分たちがやっていることのひどさをこれまで以上に激しく感じとっていたからだ」⁽³¹⁾。民族学的な資料となる品々を蒐集するのがダカール・ジブチ調査団の最大の使命であり、またこの種の資料が民族学の研究のためには貴重である以上、グリオールにとって「ヘコノ」の奪取は当然おこなうべき行為であった。しかし、レリスの眼には現地人に対する裏切りであり、瀆聖でもあると映った。彼自身も、そうした行為は民族学のためには必要なのだと一応を自分に言い聞かせるが、すでに現地人に対する聞き取り調査が尋問めいてしまう事実疑問を抱いているだけに、民族学そのものの意義を問い直さざるをえなくなるのである。九月十九日付けの手紙からやや長めに引用

してみよう。

やっていることはどれも相変わらずとても興味深いものの、それでも時間がひどく長く感じられ、仕事にときたましか情熱を感じられないが、それというのも、調査のために用いる方法が、友好的におこなう会話というよりは、予審判事の尋問にはるかに近いからで、また、品々の蒐集の方法が、十中八九、徴発とまではいかないにしても、力づくの買い取りだからだ。それやこれやでぼくの人生に暗い影が落ち、良心は半ば穏やかではない。ヘコノの略奪のような冒険じみた行為は、こうした品を手に入れる方法はほかにないし、瀆聖自体もそれなり崇高な側面を有している以上、結局、どれもぼくに後悔の念を抱かせないが、同時に、日常茶飯事の買い取りに困惑してしまうのは、悪循環のなかにいる気がしてくるからだ。人びとに黒人たちのことを知ってもらい、好きになってもらうようにするという口実で略奪をおこなうわけだが、結局のところ、それはまた新たな民族誌学者たちを養成することにつながり、彼らもまた黒人たちを「好きになり」、略奪するために出かけていくのだから。⁽³²⁾

いったん抱きはじめた疑念は、旅のあいだに深まっていくばかりだ。年が明け、調査団がカメルーンまで進んでいたころ、二月六日付けの手紙でレリスは次のように記す。「ぼくたちは聞き取り調査をまたずいぶんやった。やっていても前ほど楽しめない。こうしたことはどれもほとんど人間味を欠いている。ぼくは、この点で、民族誌学は文学よりもさらに性質が悪いと考え出している」。⁽³³⁾民族学への疑問は、それまでこの分野で信頼してきた先達への疑問ともなっていく。調査団の団長であり、現地調査の過程で彼に多くのことを学ばせてくれたにちがいないグリオールについてさえ、レリスは不満の念をつのらせていく。三月二十日付けの手紙を見てみよう。「彼に責任があるわけで

はないが、もし旅行がこんなふう——冒險的な面がこんなにも欠けたまま——ジプチまで続くならば、グリオールがぼくに無駄に二年間を過ごさせていると考えることになるし、彼のことをけつして許しはしないだろう。だいいち、帰国してからも、この企画がお役所仕事のものなどではなかったと示唆する者がいたら、誰であろうと、ぼくはその人に反論するだろう」。⁽³⁴⁾さらに、四月二日付けの手紙では次のように述べる。「ぼくをグリオールから分かつのは、彼がいれば職業として旅をしていて、彼にとっては旅が有益かどうかは、仕事の観点で得るものがあつたかどうかにはほとんどいつもかかっているという点だ。ぼくの民族誌学への熱はすっかり冷めてしまったが、それは、たしかにきわめて興味深い科学ではあるものの、民族誌学者がこの学問を心理学と同時にこなうときにしか真に人間的なものにならないからだ」。⁽³⁵⁾

このように、科学としての民族学にレリスが寄せた期待は崩れ去りつつあった。その一方で、アフリカで数ヶ月を過ごし、実際に現地の人たちの生活を眺め、それなりの接触をもったいま、彼はもはや文学を一途に信じることも、ロマン主義的な冒険の夢を抱きつづけることもできなくなっていた。それだからこそ、その著書についての好意的な書評を『ドキュマン』誌に寄稿し、アフリカに向かうレリスにとって模範のひとりでもあつたアメリカの作家ウィリアム・B・シーブルックの名著『ジャングルの秘密』についての痛烈な批判が、一九三三年二月二十八日付けの手紙には綴られる。

ぼくはハベ族に関する部分を読み、それ以外の箇所を流し読みしたところだ。これは正真正銘のがらくたで、彼が通り過ぎた地域についての完全に間違つた観念をあたえ、アメリカの「ボヘミアンの耽美主義者」の精神をひどくおぞましいかたちで照らし出している。だいいち、彼は何ひとつしっかり見なかったし、サンガでは、興味深い

ものの傍らを通り過ぎてしまい、火を見るより明らかなものさえ眼に入らなかったようだ。この本には、勇敢さを示すものも何ひとつなく、植民地主義に反対する言葉は一言も発せられず、アフリカの黒人たちを（ブラックバース）やジャズ・ミュージシャン同様に魅力的な存在として描くにとどめていて、それは誰もかも、アフリカ人もアメリカ人もともに貶めることになるのだが、なぜなら、アフリカの物差しで見れば、ジャズは、魅力的ではあるが、芸術的なちょっとしたいたずらにすぎないし、ジャズという輝かしい物差しで見れば、アフリカは暗く、平板で、ときには金びかでもほとんどのいつも惨めな代物（そうしたものはどれもアフリカ的美でもあるのだが）の集積にすぎない。ぼくは、断崖にある村を思い描かせるのにカリガリ博士やピカソを持ち出すというのも納得できない。同様に、サンガの仮面をブランクーシの彫刻に比較するなどというのは、愚かにもほどがある。⁽³⁶⁾

非常に手厳しい評言であるが、振り返ってみるなら、ここで批判の対象となっているシーブルックの姿勢は、ダカールⅡジブチ調査団に参加する以前のレリスの姿勢に重なっている。それどころか、アフリカの地を踏んでからも、レリスはともすれば《詩》を求めていた。旅がはじまって一ヵ月近くが経った一九三一年六月十七日付けの手紙には次のようにある。「ぼくはとうとう、この旅行に割り当てていた第一の意味をふたたび見いだした。それはきわめて濃密でどこまでも人間的な詩だ」。⁽³⁷⁾それから約二ヶ月後の八月十一日付けの手紙では、現地の黒人についてこのように書いている。「こうした人びとは、滑稽でもあるが、同時に、涙が出るほど感動的でもあり、なぜならそれこそが真の無邪気さ、真の奇抜さであり、要するに、ぼくがずっと捜し求めてきた詩であるからだ」。⁽³⁸⁾民族学の調査団に加わったからといって、レリスがおのれのなかの文学者を抹殺したわけではなく、それゆえにこそ、シーブルック批判は自分自身を斬る刃となってくるものでもあった。

*

文学者の陥りがちな素朴なロマン主義や安易なエキゾティシズムを否定しつつも、レリスは、科学としての民族学にもおのれの居場所を見いだせない。そうしたジレンマは、ある意味では彼が当初からかかえていたものでもあったろうが、実際に調査旅行に参加して、矛盾は深まるばかりだった。しかも、そうしたレリスのもとに、戦争へと向かいつつあるとしか見えないヨーロッパの悲観的な状況が伝わってくる。カメルーン的首都ヤウンデに滞在していた一九三二年二月二十五日の日記には、そうしたニュースに苛立つ様子が書かれている。「戦争のことが頭にこびりついて離れない。ひどい落胆と憤怒がかかるがわるがわる襲ってくる。(中略) この旅行——ぼくが自由に決め、自分で望んだ旅行だ——から帰ったあと、なんのかかわりもない人びとの手で薄汚い経済的目的のために否も応もなく召集され、また出発する破目になるかもしれない、と考えると、激しい怒りが湧き起って、もうすこしで、すぐに帰国して行動を起こしたいという気持ちになり、少なくとも、ある日不意にぼくを乱暴に弄ぶかもしれない時局から離れて、我関せずを決めこみたくなと思う」⁽³⁹⁾。翌日には、さらに悲観的な記述が続くことになる。「一日中落ち込んでいて、一瞬たりとも抜け出せない。帰ってもフランスに留まらないこと。亡命すること。こうした一切の愚行から逃げること。だどこへ行くのだ? 世界のどんな片隅にも、腐っていない場所、または腐った国家に支配されていない場所はない。機械、武器、兵隊あがりの乱暴者が蔓延している」⁽⁴⁰⁾。まさに八方塞がりの状態である。

『幻のアフリカ』の第一部は、調査団の出発から十一ヶ月が経った一九三二年四月十八日の日記で終わるが、アビシニア(エチオピア)の国境を前にしたこの日の記述には、「エキゾティシズムのとは口によやく辿りついたという実感を味わうために、なんという長い距離を走破しなければならなかったことだろう」⁽⁴¹⁾とある。この調査旅行の前

にアビシニアでフィールドワークをしてきたグリオールから、おそらくレリスはこの地や人びとの魅力について聞かされていたにちがいない。その期待の地を目前にして、彼のなかに新たな希望が芽生えつつあったのだろうか。実際、アビシニアのゴンダルで、レリスは文学者としても民族学者としても実に貴重な体験をして、それが彼ののちの人生に大きな影響を及ぼすことになる。調査旅行のなかでも最も長期の滞在をしたアビシニアの日々の記述は、『幻のアフリカ』の第二部に掲載され、この本のなかでもきわめて比重が重いと言えよう。それに対し、前半の第一部のなかで一番長く滞在した場所は仏領スーダンのサンガであり、この地で目にした仮面の儀式はレリスに強烈な印象を残す一方、サンガの秘密言語に注目することで、民族学と文学の連結点を見いだすにも至っていた。一九三二年二月十八日付けで母親に送った手紙で、彼は帰国後に民族学の研究をする決意を固めたと言及し、グリオールと相談の上、論文のテーマを、当初予定していたセネガルおよび仏領スーダンの子供社会の研究から、サンガの仮面社会の秘密言語に変更すると報告し、それは「同時に文学の仕事にもなる利点」⁴²があるからだと言明している。仏領スーダンやエチオピアでの体験がその後の彼の仕事にどのような影響を及ぼすことになるかについては、また稿を改めて論じなければならぬが、調査旅行のクライマックスでもあるアビシニア滞在を間近に控えたこの時点で、文学と民族学とを融合させる可能性がふたたび見いだされつつあったのだ。それはまた、主観性と客観性の問題であったとも言える。一九三二年四月四日には、旅行のあいだにつけている日記が出版される場合のことを想定し、その序文を草している。その一部を引いておこう。

たとえば生彩を欠いた冒険小説とか（中略）、あるいは多少なりとも生彩のある民族誌学の通俗書（中略）を出版することもできるだろう。だがぼくはそれよりもこの覚え書を公にすることを選びたい。

旅のあらまし、旅のあいだにおこなった仕事の残響、ぼくたちが体験した忘れがたい苦心などが書かれているとはいえ、この覚え書は個人的な記録以外のなものでもない。(中略) ぼくは自分で目撃した事件しか語らない。描写もわずかしかない。場違いとか些末とか評されても仕方のない細部を書き記す。もっと重要に見えるかもしれない他の細部を切り捨ててしまう。ぼくはあまりにも個人的な部分を後になって書き直したりなどは一切しなかったといってもいいだろう。だがそれも、最大限の真実に到達しなかったからだ。具体的なものの以外に真実はないからだ。特異なものを突き詰めて普遍に達するというのは間々あることだ。個人的な係数を白日のもとにさらすことで、誤差の計測が可能になる。主観性を極めることで人は客観性に到達するのだ。⁽⁴³⁾

ここでの主観性と客観性をめぐる議論は、やがて『成熟の年齢』から『ゲームの規則』、そしてさらに『オランピアの頸のリボン』と自伝的エッセを書き続けていくことになるレリスの核を形成するものだ。それはまた、シュレアリズムとリアリズムの関係にこだわりつつ執筆を続ける作家の出発点とも言える。ダカールからジブチへと移動する旅の過程で、作家レリスが真の意味で誕生しつつあった。

注

- (1) Archives du musée de l'Homme (non cotées), cités par Jean Jamin in : Michel Leiris, *Miroir de l'Afrique*, Gallimard, «Quarto», 1996, p. 26.
- (2) Cité para Jean Jamin in : Michel Leiris, *Miroir de l'Afrique*, op.cit. p. 27.
- (3) Jean Jamin, «Introduction à Miroir de l'Afrique», in : Michel Leiris, *Miroir de l'Afrique*, op.cit., p. 28.
- (4) Michel Leiris, *Journal 1922-1989*, Gallimard, 17 mai 1929, p. 169. (『ミシェル・レリス 日記』 千葉文夫訳、みすず書

房、二〇〇一年、一五七頁)

- (5) ボレルはもともとバタイユがかかっていた精神分析医であり、バタイユに八つ裂き刑にされる中国人青年の写真を見せたことで知られる。

- (6) Michel Leiris, *Journal 1922-1989*, op.cit., 28 octobre 1929, p. 203. Cf. Aliette Armel, *Michel Leiris*, Fayard, 1997, p. 296. 本稿におけるレリスの伝記的な事実に関しては、アルメルの著作に追うところが大きい。

- (7) Michel Leiris, *A propos de Georges Bataille*, fourbis, 1988, p. 26.

- (8) Michel Leiris, *L'Age d'homme*, Gallimard, «Folio», p. 161. (『ミシェル・レリス『成熟の年齢』、松崎芳隆訳、現代思潮者、一九七六年、二〇六頁)

- (9) Ibid., p. 162. (同書、二〇六頁)

- (10) Michel Leiris, *Journal 1922-1989*, op.cit., 11 juin 1929, p. 190. (『ミシェル・レリス 日記』、一七七頁)

- (11) Citee par Jean Janin in : *Michel Leiris, Miroir de l'Afrique*, op.cit., p. 32.

- (12) Michel Leiris, *Journal 1922-1989*, op.cit., 28 octobre 1929, p. 203. ちなみに、この文を記したすぐあとで、彼は「そうした研究のためには統計学を学ぶ必要があるが、それは愛の問題に関するシュルレアリストの態度と同じで、「こせこせとして合理的」であり、嫌悪感を抱くとした上で「精神分析学」と大きく記すのである。

- (13) Michel Leiris, «Saints Noirs», *Revue du cinéma*, n. 11, juin 1930, repris in Michel Leiris, *Zébrage*, Gallimard, «folio essai», 1992, p. 23.

- (14) Michel Leiris, «L'œil de l'ethnographie», *Documents*, n. 7, novembre 1930, repris in Michel Leiris, *Zébrage*, op.cit., p. 33.

- (15) Cf. Jean Janin, «Introduction à Miroir de l'Afrique», in : Michel Leiris, *Miroir de l'Afrique*, op.cit., p. 35.

- (16) Michel Leiris, *C'est-à-dire*, Jean-Michel Place, 1992, p. 23.

- (17) Ibid., p. 32.

- (18) Michel Leiris, *Journal 1922-1989*, op.cit., p. 208. (『ミシェル・レリス日記』、一九四頁)

- (19) Ibid., p. 209. (同書、一九五頁)

- (20) Ibid., p. 210. (同書、一九五頁)

- (21) Michel Leiris, *C'est-à-dire*, op. cit., p. 36. また、一九二九年に仏領スーダンに渡ったランブールからレリス宛てられた手紙にコンラッドの『闇の奥』についての言及があり、ランブールが「暗黒大陸の抗しがたい呼びかけ」を強調していた事実にも注目しなくてはならない。 Cf. Aliette Armel, *Michel Leiris*, op.cit., p. 305-306.
- (22) Michel Leiris, *Miroir de l'Afrique*, op.cit., p. 388, note 35.
- (23) *Ibid.*, *L'Afrique fantôme*, le 28 septembre 1931, p. 213. (シニェル・レリス『幻のアフリカ』、岡谷公二他訳、河出書房新社、一九九五年、一〇五頁)
- (24) *Ibid.*, le 10 mars 1932, p. 370. (同書、一二〇頁)
- (25) *Ibid.*, le 13 août 1931, p. 174. (同書、七八頁)
- (26) *Ibid.*, le 2 février 1932, p. 341. (同書、一七八頁)
- (27) *Ibid.*, lettre du 13 novembre, p. 267.
- (28) *Ibid.*, lettre du 26 septembre 1931, p. 211.
- (29) *Ibid.*, le 16 juillet 1931, p. 154. (シニェル・レリス『幻のアフリカ』、六一・六二頁)
- (30) *Ibid.*, le 15 août 1931, p. 178. (同書、八〇頁)
- (31) *Ibid.*, le 7 septembre 1931, p. 195. (同書、九二頁)
- (32) *Ibid.*, lettre du 18 septembre 1931, p. 204.
- (33) *Ibid.*, lettre du 6 février 1932, p. 342.
- (34) *Ibid.*, lettre du 30 mars 1932, p. 391.
- (35) *Ibid.*, lettre du 2 avril 1932, p. 392.
- (36) *Ibid.*, lettre du 28 février 1932, p. 362.
- (37) *Ibid.*, lettre du 17 juin 1931, p. 130.
- (38) *Ibid.*, lettre du 12 août 1931, p. 173.
- (39) *Ibid.*, le 25 février 1932, p. 359. (シニェル・レリス『幻のアフリカ』、一九二一九二頁)
- (40) *Ibid.*, le 26 février 1932, p. 360. (同書、一九二頁)

- (41) *Ibid.*, le 18 avril 1932, p. 417. (回書'一一三三頁)
- (42) *Ibid.*, lettre du 18 février 1932, p. 355.
- (43) *Ibid.*, le 4 avril 1932, p. 394–395. (回書'一一八一一九頁)